

長岡京跡右京・久保川遺跡出土の墨書石

右京第七三五次調査（九条三坊十一・十二町）において、奈良時代中頃から平安時代前期にかけて機能した庭園跡が検出され、そこから墨書石が出土した（下の写真・図）。出土地点は、池跡南岸の洲浜とその西側に広がる礫敷き遺構との間に位置する。

墨書石は、やや扁平な自然石で、平面の両面に墨書がある。写真左の面には、渦巻き状文様を中心に書き、中心を下方にして王、鬼、神などの字が四方に配される。王の下には符籙が記される。王と鬼は対向して三字づつ記され、神は大きく、一字のみ記される。神の対向位置にも墨痕は確認できるが、大半を欠損する。渦巻き状文様の筆の運びから推測される天地と符籙のそれが一致することから、王を頂部とする向きが正位置のようである。渦巻き状文様は、右まわりに書かれ、二重目の頂部に達したところで中心に帰す。写真右の面の渦巻き状文様は三重に書かれ、筆の運びと形態は、もう一方の面と同様である。周囲に文字は記されていない。これら渦巻き状文様は、近世のまじないにみられる「ヒノワ」と呼ばれる文様に酷似する。以上の特徴から、本例がまじないに関わることは推測に難くないが、具体的な意味については速断できない。類例の増加を待つて後考を期したい。

（古閑正浩（大山崎町教育委員会）



長軸106mm、中軸75mm
最大厚26mm、最小厚22mm
石材：砂岩

（写真の縮尺は1.5分の1、トレース図は4分の1）

墨 書 石

